

し安全にスポーツを楽しむように啓蒙を図っている。

MG 装着により筋力増強や、著しい筋力の低下も認めず、集中力が向上することがうかがえ、急患受診率の低下より MG は口腔領域のスポーツ外傷の予防に有効性が示唆された。

演題 4. 1991年～2000年の歯科新来患者の推移

○戸塚 盛雄, 福田 容子, 木村 正
中村弥栄子

岩手医科大学歯学部歯科予診室

近年、我が国では急激な高齢化および少子化、さらに歯科医師の増加が言われている。これらの影響により歯科医療を取り巻く環境は年々困難な状況になっている。岩手医科大学歯学部付属病院においても患者数の減少が問題となっている。今回、1991年から2000年までの最近10年間における岩手県および盛岡市の人口、岩手県歯科医師会会員数、本学歯学部付属病院の新来患者数などについて検討し、次の結果を得た。

1. 1990年～1999年の10年間の岩手県の人口は約141万人で、盛岡市の人口は約28万人でほとんど変化していなかった。

2. 岩手県の人口ピラミッドで、1990年と1999年とで比較すると、男女ともに20歳未満と35歳～44歳までの人口が減少しており、逆に65歳以上の老年人口は増加しており、岩手県においても高齢化と少子化が見られた。

3. 1991年～2001年の岩手県歯科医師会会員数では、岩手県全体では532名から640名と増加しており、盛岡市では134名から190名と増加していた。

4. 1991年～2000年までの本学歯学部付属病院の新来患者数では、1991年が5500名と最も多く、その後多少の増減はあるが年々60～70名減少し、2000年には4900名台となっていた。年齢別では10歳未満は1100名から600名と500名減少、10歳代も800名から600名と200名減少していた。20歳代から50歳代は最近10年間ほとんど変化しなかった。60歳代は500名から580名、70歳代は250から400名、80才以上は50名から80名と明らかに増加していた。

5. 歯科予診室の新來台帳に記載されている診療科別新来患者数では、口腔外科は2100名から2600名、歯科麻酔科は14名から52名と増加していた。矯正歯科は850名から500名と約350名、充填・歯内科が780名から

470名と約300名、小児歯科は430名から280名と約150名、補綴科は780名から550名と約230名減少していた。

演題 5. 過去 6 年間の本学受診者における歯科外傷の実態調査

○柳谷 隆仁, 工藤 義之, 吉田由佳里*
久保田 稔

岩手医科大学歯学部歯科保存学第一講座
山形市矢口歯科分院*

歯科外傷は歯牙硬組織、歯周組織や付随する軟組織を一部または全部巻き込んだ疾患である。歯科外傷の処置に際しては、歯科全般にわたる知識と技術が要求されるため、岩手医科大学歯学部附属病院を受診するケースが多いと考えられる。しかし、本学受診者における歯科外傷の実態についてはあまり知られていない。そこで我々は平成7年1月から平成12年12月までの6年間に本学歯科予診室を受診した患者34790名を対象に歯科外傷の実態調査を行った。

本学歯科予診室にて作成された新患名簿をもとに性別、年齢、歯科外傷の型を調査した。歯科外傷の型は新患名簿の診断名をもとに歯牙破折、脱臼、骨折、口腔内裂傷、口腔外裂傷、その他に分類した。

6年間に本学歯科予診室を受診した患者34790名中、歯科外傷を主訴として来院した患者は690名で、罹患率は1.98%であった。また、6年間に受診した歯科外傷患者690名中、115名(16.7%)の患者が初診時に第一保存科を受診していた。

1年ごとの歯科外傷患者数は76～140名の間に分布し、男女比は約2:1であった。

歯科外傷患者全体の年齢別分布では、1歳が最も多く、1～4歳時と18歳前後の2つのピークが認められた。初診時に第一保存科を受診した歯科外傷患者の年齢別分布を見ると18歳前後にピークが認められた。

外傷患者全体の疾患別分布では、口腔内裂傷が最も多く、続いて脱臼、歯牙破折の順であった。初診時に第一保存科を受診した患者では歯牙破折が多く、続いて脱臼が多く認められた。

年齢と疾患と患者数の関係では、乳幼児期の口腔内裂傷が圧倒的に多く、次いで乳歯の脱臼、18歳前後の脱臼、歯牙破折が多く認められた。